

各位

三重県病害虫防除所長

令和元年度病害虫発生予報第4号

ページ

1. 向こう1か月の予報と対策	1
2. 作物別の状況	2
3. 発生時期・発生量(平年比)の予察根拠	7
4. 予察項目の見方	13
5. 気象のデータ	14
6. おしらせ	16

このことについて、下記のとおり発表します。

1. 向こう1か月の予報と対策

1) 作物

イネでは、穂いもち、白葉枯病、斑点米カメムシ類、トビイロウンカの発生量は**平年並**と予想されます。紋枯病、イネクロカメムシの発生量は**やや少**と予想されま
す。ツマグロヨコバイ、セジロウンカの発生量は**少**と予想されます。

ダイズでは、ハスモンヨトウの発生量は**やや多**と予想されます。今後の発生状
況に注意してください。紫斑病、コガネムシ類、吸実性カメムシ類の発生量は**や
や少**と予想されます。

2) 果樹

カンキツでは、かいよう病(温州、中晩柑)、黒点病、ミカンハダニ、チャノキイロ
アザミウマの発生量は**平年並**と予想されます。

果樹共通では、カメムシ類の発生量は**平年並**と予想されます。

3) 茶

チャでは、チャノミドリヒメヨコバイの発生量は**やや多**と予想されます。今後の発
生状況に注意してください。カンザワハダニ、チャノキイロアザミウマ、チャノココク
モンハマキの発生量は**平年並**と予想されます。炭疽病の発生量は**やや少**と予想
されます。

4) 野菜

イチゴの炭疽病は、**やや少**と予想されます。

515-2316 三重県松阪市嬉野川北町 530
TEL 0598-42-6365 Fax 0598-42-7568
ホームぺ <http://www.pref.mie.lg.jp/byogai/hp/index.h>

農薬はラベルの表示を確認して、正しく使用してください。

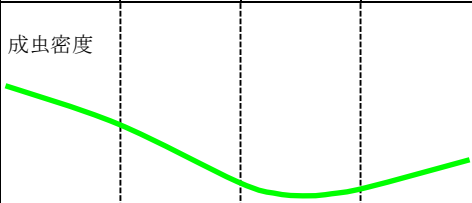
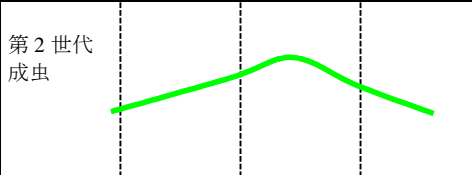
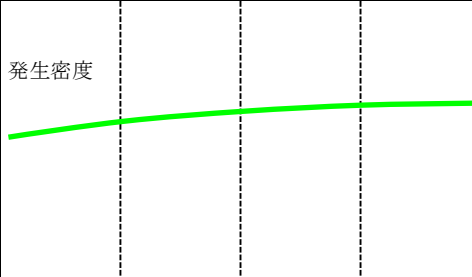
2. 作物別の状況

作物名	病害虫名	発生時期	発生量		要防除圃場率	発生活消長の一例				防除の注意事項
						7月		8月		
						下旬	下旬	中旬	下旬	
イネ	穂いもち	—	平年並	中	普通	出穂 ↓				<ol style="list-style-type: none"> 1) いもち病の発生好適条件が続いています。病害虫防除技術情報第5号(7月12日発表)を参照してください。 2) 葉いもちが上位葉で発生している圃場では、感染の恐れがあります。発生状況に注意してください。 3) これから出穂期となる圃場において、薬剤散布する場合は、出穂始めから穂揃い期に実施してください。 3) 特に作期のおそい圃場や、いもち病に弱い品種は、適期防除を徹底してください。
	紋枯病	—	やや少	中	低	出穂 ↓				<ol style="list-style-type: none"> 1) 高温多湿条件で発病が助長されます。 2) 多肥、過繁茂の圃場では発生しやすくなります。 3) 薬剤散布は出穂7～10日前に実施してください。
	白葉枯病	—	平年並	小	低					<ol style="list-style-type: none"> 1) 常発地では、台風や集中豪雨の遭遇直後に薬剤散布してください。 2) 「みえのゆめ」は耐病性の弱い品種なので注意が必要です。
	斑点米カメムシ類	—	平年並	中	普通					<ol style="list-style-type: none"> 1) 薬剤散布は穂揃い期に実施してください。広域での一斉防除が効果的です。 2) 中山間など山沿いの地域では、穂揃い期防除の7～10日後に2回目の防除をしてください。 3) 平坦地域においても、防除後に発生が確認された場合は、2回目の防除を実施してください。 4) 周囲よりも出穂の早い水田および遅い水田では、被害が集中するので防除を徹底してください。
	イネクロカメムシ	—	やや少	小	低					<ol style="list-style-type: none"> 1) 発生圃場では、今後出すくみ穂や白穂被害が目立つようになります。 2) 常発地で薬剤散布する場合は、株元までかかるように行ってください。

作物名	病害虫名	発生時期	発生量		要防除圃場率	発生活消長の一例				防除の注意事項
						7月	8月			
		平年比	平年比	程度	平年比	下旬	上旬	中旬	下旬	
イネ	ツマグロヨコバイ	—	少	小	低	成虫密度				1) 9月上旬までに収穫する圃場では、実害はほとんどありません。
	セジロウンカ	—	少	小	低	成虫密度				1) 本年は県内で多飛来がありません。
	トビイロウンカ	—	平年並	小	低	成虫密度				1) 本年は県内で多飛来がありません。
ダイズ	紫斑病	—	やや少	小	普通			発病密度		1) これから播種する圃場では、種子消毒を徹底してください。 2) 莢が形成され始めたら、薬剤散布をしてください。
	コガネムシ類	—	やや少	中	普通	成虫密度				1) 通常は防除の必要はありませんが、多発する場合は加害初期に防除してください。 2) ヒメコガネとドウガネブイブイは夜行性の種のため、夕方に薬剤散布すると効果的です。
	ハスモンヨトウ	—	やや多	中	普通			被害量		1) 白変葉を目印に早期発見に努め、若齢幼虫期に防除して下さい。 2) 発生量が急増することがありますので、防除所ホームページにおいて、フェロモントラップでの誘殺状況に注意してください。

作物名	病害虫名	発生時期	発生量		要防除圃場率	発生消長の一例				防除の注意事項
						7月		8月		
						下旬	下旬	中旬	下旬	
ダイズ	吸実性カメムシ類	—	やや少	小	普通			開花 ↓		<ul style="list-style-type: none"> 1) 近年、ミナミアオカメムシによる被害粒の多発や、青立ち症状が増加しています。 2) 薬剤散布は、9月中旬(開花 20 日後・莢伸長期)と 10月上旬(開花 40 日後・子実肥大中期)の 2 回散布が効果的です。 3) 遅くとも、9月下旬(開花 30 日後・子実肥大初期)までに 1 回目の薬剤散布をしてください。 4) 移動性が高いため、広域一斉防除が効果的です。 5) エチプロール剤およびジノテフラン剤は、ミナミアオカメムシの殺虫効果が高いことが確認されています。
カンキツ	黒点病	—	平年並	小	普通	発病密度				<ul style="list-style-type: none"> 1) 薬剤散布を定期的の実施し、8月下旬まで感染防止に努めてください。 2) 梅雨明け後は感染源となる枯枝が増加するので、切除に努めてください。 3) 薬剤散布後、積算で 200mm 以上の降雨があれば 2 回目の防除を実施してください。
	かいよう病	—	温州平年並 中晩柑平年並	温州小 中晩柑中	温州低 中晩柑普通	発病密度				<ul style="list-style-type: none"> 1) 果実・夏枝に病斑が見られる圃場では、発病した枝・葉・果実を除去し、薬剤防除を行ってください。 2) 防風対策に努め、台風の接近が予想される場合には、直前に防除してください。 3) 高接樹や幼木については、ミカンハモグリガの防除も徹底してください。
	ミカンハダニ	—	平年並	中	普通	成ダニ密度				<ul style="list-style-type: none"> 1) 1 葉当りの雌成虫寄生数が 0.5~1.0 頭程度を目安に防除してください。 2) 高温により活動が停滞する時期ですが、圃場での発生状況をよく確認し、多発している場合は防除してください。 3) 薬剤散布は葉裏にかかるよう、丁寧に散布してください。 4) 薬剤抵抗性の発達を回避するため、同一系統の薬剤の連用を避けてください。

作物名	病害虫名	発生時期	発生量		要防除圃場率	発生消長の一例				防除の注意事項
						7月	8月			
						下旬	上旬	中旬	下旬	
カンキツ	チャノキイロアザミウマ	—	平年並	中	普通					<ol style="list-style-type: none"> 1) 寄生果率 10%になった時を防除の目安にしてください。 2) 7月以降は寄生部位が果頂部に移ります。
果樹共通	カメムシ類	—	平年並	中	普通					<ol style="list-style-type: none"> 1) 圃場内を観察し、飛来が認められたら防除を実施してください。 2) 圃場(特にナシ、カキ)によっては局所的に飛来してきます。過去に発生が多かった圃場周辺では注意してください。 3) ナシ、ブドウの有袋栽培では、袋と果実が密着すると袋の上から加害されることがあります。
チャ	炭疽病	—	やや少	小	普通					<ol style="list-style-type: none"> 1) 感染源は旧葉、感染するのは新芽の上位葉で、新芽生育期に降雨が続くと発生が多くなります。 2) 防除時期は1~2葉展開期です。 3) 整枝による病斑葉の刈り落としも防除効果があります。ただし、葉層の確保充実も考慮してください。 4) 耐性菌が出現しやすいため同一系統の薬剤の連用は避けてください。
	カンザワハダニ	—	平年並	小	普通					<ol style="list-style-type: none"> 1) 発生が少なければ防除の必要はありません。 2) 抵抗性の発達を避けるため、同一系統の薬剤の連用は避けてください。
	チャノミドリヒメコバエ	—	やや多	中	普通					<ol style="list-style-type: none"> 1) 新芽の先が褐変し、ひどいときは芽が硬化し発育が停止します。 2) 晴天が続くと発生が多くなります。 3) 新芽の開葉初期に防除してください。 4) 一斉防除が効果的です。

作物名	病害虫名	発生時期	発生量		要防除圃場率	発生消長の一例				防除の注意事項
						7月	8月			
						下旬	上旬	中旬	下旬	
チャ	チャノキイロアザミウマ	—	平年並	中	普通	成虫密度		1) 萌芽期に加害されると芽の成長が止まり、褐変枯死する場合があります。 2) 晴天が続くと発生が多くなります。 3) 新芽の萌芽～開葉初期に防除してください。 4) 一斉防除が効果的です。		
	チャノコカクモンハマキ	—	平年並	小	普通	第2世代成虫		1) 第2世代成虫発生時期は、平年並と予想されます。 2) 若齢幼虫期に防除してください。防除適期は成虫発生ピークから7日～10日後頃です。 3) 病害虫防除所ホームページにフェロモントラップ誘殺状況を掲載していますので参考にしてください。		
イチゴ	炭疽病	—	やや少	小	普通	発生密度		1) 発病株は感染源となるため、周辺株も含めて速やかに除去し、圃場外に持ち出して適切に処分してください。 2) 薬剤による予防防除を徹底してください。降雨、台風等の前後は特に重点的に防除してください。 3) 耐性菌が出現しやすいため同一系統薬剤の連用は避けてください。 4) 病原菌を含む水滴の跳ね返りによって感染が拡大します。水滴が跳ね返らないよう、丁寧に灌水を行ってください。		

3. 発生時期・発生量(平年比)の予察根拠

作物名	病害虫名	発生時期 平年比	発生量 平年比	予察根拠
イネ	穂いもち	—	平年並	<p>要因</p> <p>1) 1か月予報(7月11日発表)によると、気温は平年並、降水量は期間の前半は曇りや雨の日が多く平年並の予想(+)、</p> <p>2) 巡回調査圃場(7月第1週)では、葉いもちの発生圃場率1.3%(平年15.0%)と少、発病度0.02(平年1.64)と少、発病株における上位葉への進展率0%(平年4.2%)と少(—)</p> <p>3) 一般圃場では、葉いもちの発生量は少～やや多(概して平年並)。(±)</p> <p>考察: 今後の気象条件、巡回調査結果から、予想発生量は平年並と考えます。</p>
	紋枯病	—	やや少	<p>要因</p> <p>1) 1か月予報(7月11日発表)によると、気温は平年並、降水量は期間の前半は曇りや雨の日が多く平年並の予想(±)</p> <p>2) 巡回調査圃場(7月第1週)では、発生圃場率0%(平年5.6%)と少、発病株率0%(平年0.5%)と少(—)</p> <p>3) 一般圃場では、発生量は無～少(概して無)(—)</p> <p>考察: 今後の気象条件、巡回及び一般圃場調査結果から、予想発生量はやや少と考えます</p>
	白葉枯病	—	平年並	<p>要因</p> <p>1) 巡回調査圃場(7月第1週)では、発生圃場率0%(平年0%)と平年並に少(±)</p> <p>2) 一般圃場では、発生量は無(—)</p> <p>考察: 現状の発生量は平年並に少と考えられ、引き続き予想発生量は平年並と考えます。</p>
	斑点米カメムシ類	—	平年並	<p>要因</p> <p>1) 1か月予報(7月11日発表)によると、気温は平年並、降水量は期間の前半は曇りや雨の日が多く平年並の予想(±)</p> <p>2) 予察灯(松阪市・6月第1半旬～6月第6半旬)では、誘殺数はアカスジカスミカメ50頭(平年55.2頭)と平年並、アカヒゲホソミドリカスミカメ31頭(平年75.6頭)と少、クモヘリカメムシ0頭(平年0.2頭)と少(—)</p> <p>3) 巡回調査圃場(7月第1週)では、畦畔イネ科雑草すくい取りによる、アカスジカスミカメの発生地点率43.1%(平年35.1%)と多、すくい取り成虫数4.1頭(平年3.9頭)と平年並、アカヒゲホソミドリカスミカメの発生地点率15.5%(平年9.2%)と多、すくい取り成虫数0.3頭(平年0.3頭)と平年並、ホソハリカメムシの発生地点率7.8%(平年21.1%)と少、すくい取り成虫数0.2頭(平年0.5頭)と少、クモヘリカメムシ発生地点率3.4%(平年6.9%)と少、すくい取り成虫数0.3頭(平年0.5頭)と少、シラホシカメムシ類の発生地点率3.4%(平年10.5%)と少、すくい取り成虫数0.03頭(平年0.15頭)と少(—)</p> <p>4) 広域病害虫防除員調査(7月1日～7日)では、ホソハリカメムシ、クモヘリカメムシ、シラホシカメムシ類のすくい取り成虫数がそれぞれ、0.59頭(平年0.44頭)と多、0.92頭(平年0.47頭)と多、0.07頭(平年0.08頭)と平年並(+)</p> <p>5) 一般圃場では、発生量は少～やや多(概して平年並)(±)</p> <p>考察: 巡回調査、一般圃場調査、広域防除員調査結果から、現状の発生量及び予想発生量は平年並と考えます。</p>

作物名	病害虫名	発生時期 平年比	発生量 平年比	予察根拠
イネ	イネクロカメムシ	—	やや少	<p>要因</p> <p>1) 予察灯(松阪市・4月第1半旬～6月第6半旬)では、誘殺数は水田位置 15 頭(平年 10.0 頭)と多、畑位置 99 頭(平年 204.2 頭)と少 (±)</p> <p>2) 巡回調査圃場(7月第1週)では、発生圃場率 11.9%(平年 18.3%)と少、被害株率 0.5%(平年 2.2%)と少 (—)</p> <p>3) 一般圃場では、発生量は少～やや少(概して少) (—)</p> <p>考察: 予察灯、巡回調査結果、一般圃場の発生状況から、予想発生量はやや少と考えます。</p>
	ツマグロヨコバイ	—	少	<p>要因</p> <p>1) 予察灯(6月第1半旬～6月第6半旬)では、誘殺数は松阪市・水田位置 0 頭(平年 2.3 頭)と少、松阪市・畑位置 581 頭(平年 2,165 頭)と少、伊賀市 5 頭(平年 19.4 頭)とやや少、紀北町 6 頭(平年 3.3 頭)と多、御浜町 1 頭(平年 4.0 頭)と少 (—)</p> <p>2) 巡回調査圃場(7月第1週)では、発生圃場率 21.6%(平年 26.0%)とやや少、払い落とし成幼虫数 0.4 頭(平年 1.3 頭)と少 (—)</p> <p>3) 一般圃場では、発生量は概して少 (—)</p> <p>考察: 予察灯、巡回調査結果、一般圃場の発生状況から、予想発生量は少と考えます。</p>
	セジロウンカ	—	少	<p>要因</p> <p>1) 予察灯(5月第1半旬～6月第6半旬)では、誘殺数は松阪市・水田位置 0 頭(平年 1.0 頭)と少、松阪市・畑位置 0 頭(平年 11.1 頭)と少、伊賀市 1 頭(平年 1.2 頭)と平年並、紀北町 0 頭(平年 4.0 頭)と少、御浜町 7 頭(平年 24.2 頭)とやや少 (—)</p> <p>2) 巡回調査圃場(7月第1週)では、紀州地域では、発生圃場率 6.3%(平年 14.4%)と少、払い落とし成虫数 0.06 頭(平年 0.25 頭)と少、県全体では、発生圃場率 0.4%(平年 2.6%)と少、払い落とし成虫数 0.004 頭(平年 0.04 頭)と少 (—)</p> <p>3) 一般圃場では、発生量は少 (—)</p> <p>4) 九州地方において7月上旬までの飛来が、平年並の報告事例がある。 (±)</p> <p>考察: 予察灯、巡回調査結果、一般圃場の発生状況、他県の飛来状況から、予想発生量は少と考えます。</p>
	トビイロウンカ	—	平年並	<p>要因</p> <p>1) 予察灯(5月第1半旬～6月第6半旬)では、松阪市・水田位置、松阪市・畑位置、伊賀市、紀北町において 0 頭(平年 0 頭)と平年並に少、御浜町では 2 頭(平年 0.1 頭)と多(平年 7月上旬まで未飛来) (±)</p> <p>2) 巡回調査圃場(7月第1週)では、発生圃場率 0.42%(平年 0.03%)と多、払い落とし成虫数 0.01 頭(平年 0.0006 頭)と多 (+)</p> <p>3) 一般圃場では、発生量は無～少(概して無) (—)</p> <p>4) 九州地方において、7月上旬までに多飛来の報告事例がある。 (+)</p> <p>考察: 予察灯、巡回調査結果、一般圃場の発生状況から、予想発生量は平年並と考えます。</p>

作物名	病害虫名	発生時期 平年比	発生量 平年比	予察根拠
ダイズ	紫斑病	—	やや少	<p>要因</p> <p>1) 1か月予報(7月11日発表)によると、気温は平年並、降水量は期間の前半は曇りや雨の日が多く平年並の予想 (+)</p> <p>2) 巡回調査圃場(昨年11月)では、紫斑粒の発生率0.12%(平年0.42%)と少 (-)</p> <p>考察: 今後の気象条件、昨年の紫斑粒発生状況から、予想発生量はやや少と考えます。</p>
	コガネムシ類	—	やや少	<p>要因</p> <p>1) 予察灯(松阪市・4月第1半旬~7月第1半旬)では、誘殺数はドウガネブイブイ105頭(平年135.0頭)と少、ヒメコガネ14頭(平年28.2頭)と少 (-)</p> <p>2) 県予察圃フェロモントラップ(5月上旬~7月上旬)では、誘殺数はマメコガネ7頭(平年114.8頭)と少、ドウガネブイブイ33頭(平年37.1頭)と平年並、ヒメコガネ3頭(平年4.2頭)とやや少 (-)</p> <p>考察: フェロモントラップの誘殺状況を重視して、予想発生量はやや少と考えます。</p>
	ハスモンヨトウ	—	やや多	<p>要因</p> <p>1) 1か月予報(7月11日発表)によると、気温は平年並、降水量は期間の前半は曇りや雨の日が多く平年並の予想 (-)</p> <p>2) 県予察圃フェロモントラップ(6月第3半旬~7月第2半旬)では、誘殺数は498頭(平年254.0頭)と多 (+)</p> <p>考察: 今後の気象条件、フェロモントラップの誘殺状況から、予想発生量はやや多と考えます。</p>
	吸実性カメムシ類	—	やや少	<p>要因</p> <p>1) 予察灯(松阪市・6月第2半旬~7月第1半旬)では、誘殺数はイチモンジカメムシ22頭(平年30.4頭)とやや少、ミナミアオカメムシ水田位置7頭(8年平均3.6頭)と多の傾向、畑位置15頭(平年26.6頭)と少、クサギカメムシ0頭(平年41.6頭)と少 (-)</p> <p>考察: 予察灯の誘殺状況から、予想発生量はやや少と考えます。</p>
カンキツ	黒点病	—	平年並	<p>要因</p> <p>1) 1か月予報(7月11日発表)によると、平年に比べ気温は平年並、降水量は平年並の予想 (±)</p> <p>2) 県予察圃(7月上旬)では、果実発病率100.0(平年93.3)と平年並 (±)</p> <p>3) 巡回調査圃場(7月第1週)では、果実発病度0(平年1.2)と平年並の傾向 (±)</p> <p>4) 一般圃場では、発生量はやや少~平年並(概して平年並) (±)</p> <p>5) 感染源となる枯枝は平年並 (±)</p> <p>考察: 現状の発生量は平年並と考えられ、引き続き予想発生量は平年並と考えます。</p>

作物名	病害虫名	発生時期 平年比	発生量 平年比	予察根拠
カンキツ	かいよう病	—	温州 平年並 中晩柑 平年並	<p>要因</p> <p>1) 1か月予報(7月11日発表)によると、平年に比べ気温は平年並、降水量は平年並の予想 (±)</p> <p>2) 県予察圃(7月上旬、新甘夏)では、発病葉率 12.2%(平年 2.2%)と多、発病果率 0.1%(平年 1.3%)と少 (±)</p> <p>3) 巡回調査圃場(7月第1週)では、温州みかんは発病葉率 0%(平年 0.2%)と平年並の傾向、発病果率 0%(平年 0.09%)と平年並、中晩柑は発病葉率 5.3%(平年 8.6%)と少、発病果率 0%(平年 2.7%)と少 (温州±、中晩柑—)</p> <p>4) 一般圃場では、発生量はやや少～平年並 (概して平年並) (±)</p> <p>考察：現状の発生量は温州みかん、中晩柑ともに平年並と考えられ、引き続き予想発生量は平年並と考えます。</p>
	ミカンハダニ	—	平年並	<p>要因</p> <p>1) 1か月予報(7月11日発表)によると、平年に比べ気温は平年並、降水量は平年並の予想 (±)</p> <p>2) 県予察圃(7月上旬)では、100葉当り寄生頭数は無防除区で 6.7頭(平年 10.1頭)とやや少、慣行防除区で 0.0頭(平年 8.3頭)と少 (—)</p> <p>3) 巡回調査圃場(7月第1週)では、新葉における寄生葉率 2.8%(平年 8.6%)と少、寄生頭数 0.05頭/葉(平年 0.3頭/葉)とやや少の傾向 (—)</p> <p>4) 一般圃場では、発生量は平年並 (±)</p> <p>考察：一般圃場の発生状況を重視して、現状の発生量は平年並と考えられ、引き続き予想発生量は平年並と考えます。</p>
	チャノキイロアザミウマ	—	平年並	<p>要因</p> <p>1) 県予察圃黄色粘着トラップ(7月上旬)では、誘殺数 4.2頭/日(平年 2.5頭/日)とやや多の傾向 (+)</p> <p>2) 県予察圃(7月上旬)では、100果当り寄生虫数 1.7頭(平年 6.9頭)と少 (—)</p> <p>3) 巡回調査圃場(7月第1週)では、被害果率 0%(平年 1.0%)と少 (—)</p> <p>4) 一般圃場では、発生量は平年並 (±)</p> <p>考察：一般圃場での発生状況を重視して、現状の発生量は平年並と考えられ、引き続き予想発生量は平年並と考えます。</p>

作物名	病害虫名	発生時期 平年比	発生量 平年比	予察根拠
果樹共通	カメムシ類	—	平年並	<p>要因</p> <p>1) 予察灯(御浜町:6月21日～6月30日)では、誘殺数はチャバネアオカメムシ 281.0 頭(平年 3,278.5 頭)と少、ツヤアオカメムシ 13 頭(平年 67.2 頭)とやや少 (—)</p> <p>2) 予察灯(畑・松阪市:6月第3半旬～7月第2半旬)では、誘殺数はチャバネアオカメムシ 231 頭(平年 819.9 頭)と少、ツヤアオカメムシ 61 頭(平年 444.2 頭)と少、クサギカメムシ 0 頭(平年 73.0 頭)と少 (—)</p> <p>3) フェロモントラップ(6月第2週～7月第1週)では、チャバネアオカメムシ誘殺数は山地(津市白山町川口)で 1372.0 頭(平年 785.5 頭)と多、中間地(津市白山町二本木)で 1,390.5 頭(平年 1,329.2 頭)と平年並、平坦地(松阪市嬉野川北町)で 153.0 頭(平年 133.8 頭)と平年並 (+)</p> <p>4) 巡回調査圃場(7月第1週)では、カンキツ圃場での叩き落とし虫数 0 頭(平年 0.03 頭)と平年並に少、カキ圃場での被害果率 0%(平年 0.8%)と平年並に少 (±)</p> <p>考察: 現状の発生量は平年並と考えられ、引き続き予想発生量は平年並と考えます。</p>
	炭疽病	—	やや少	<p>要因</p> <p>1) 1 か月予報(7月11日発表)によると、気温は平年並、降水量は期間の前半は曇りや雨の日が多く平年並の予想 (+)</p> <p>2) 県予察圃では、二番茶期の病葉数 0 枚/m²(平年 0.5 枚/m²)と少 (—)</p> <p>3) 巡回調査圃場(7月第1週)では、発病葉数 0.1 枚/m²(平年 1.3 枚/m²)と少 (—)</p> <p>4) 一般圃場では、発生量は少 (—)</p> <p>考察: 現状の発生量は少と考えられ、今後の気象状況を考慮して予想発生量はやや少と考えます。</p>
	カンザワハダニ	—	平年並	<p>要因</p> <p>1) 1 か月予報(7月11日発表)によると、平年に比べ気温は平年並、降水量は平年並の予想 (±)</p> <p>2) 県予察圃(6月中旬～7月上旬)では、寄生葉率 1.0%(平年 2.9%)と少、寄生頭数 0.01 頭/葉(平年 0.22 頭/葉)と少 (—)</p> <p>3) 巡回調査圃場(7月第1週)では、寄生葉率 0.6%(平年 1.1%)とやや少、寄生頭数 0.01 頭/葉(平年 0.07 頭/葉)とやや少、発生圃場率 17.6%(平年 12.7%)とやや多 (±)</p> <p>4) 一般圃場では、発生量はやや多 (+)</p> <p>考察: 現状の発生量は平年並と考えられ、引き続き予想発生量は平年並と考えます。</p>
チャノミドリヒメコバイ	—	やや多	<p>要因</p> <p>1) 1 か月予報(7月11日発表)によると、平年に比べ気温は平年並、降水量は平年並の予想 (±)</p> <p>2) 県予察圃黄色粘着トラップ(6月第2半旬～7月第1半旬)では、捕殺数 96.0 頭(6年平均 72.3 頭)とやや多の傾向 (+)</p> <p>3) 巡回調査圃場(7月第1週)では、叩き落とし虫数 3.5 頭(平年 2.1 頭)と多 (+)</p> <p>4) 一般圃場では、発生量は多 (+)</p> <p>考察: 現状の発生量は県予察圃の発生量を重視してやや多と考えられ、引き続き予想発生量はやや多と考えます。</p>	

作物名	病害虫名	発生時期 平年比	発生量 平年比	予察根拠
チャ	チャノキイロアザミウマ	—	平年並	<p>要因</p> <p>1) 1か月予報(7月11日発表)によると、平年に比べ気温は平年並、降水量は平年並の予想 (±)</p> <p>2) 県予察圃黄色粘着トラップ(6月第2半旬～7月第1半旬)では、捕殺数 1,222 頭(6年平均 1,169 頭)と平年並の傾向 (±)</p> <p>3) 巡回調査圃場(7月第1週)では、叩き落とし虫数 0.3 頭(平年 16.0 頭)と少 (－)</p> <p>4) 一般圃場では、発生量は平年並 (±)</p> <p>考察：現状の発生量は平年並と考えられ、引き続き予想発生量は平年並と考えます。</p>
	チャノコカクモンハマキ	—	平年並	<p>要因</p> <p>1) 1か月予報(7月11日発表)によると、平年に比べ気温は平年並、降水量は平年並の予想 (±)</p> <p>2) 県予察圃フェロモントラップ(6月第2半旬～7月第1半旬)では、誘殺数 1,060 頭(平年 666 頭)と多 (+)</p> <p>3) 巡回調査圃場(7月第1週)では、ハマキムシ類巻葉数 0.24 枚/m²(平年 0.13 枚/m²)とやや多 (+)</p> <p>4) 一般圃場では、ハマキムシ類の発生量は平年並 (±)</p> <p>考察：現状の発生量は一般圃場の発生量を重視して平年並と考えられ、引き続き予想発生量は平年並と考えます。</p>
イチゴ	炭疽病	—	やや少	<p>要因</p> <p>1) 1か月予報(7月11日発表)によると、平年に比べ気温は平年並、降水量は平年並の予想 (±)</p> <p>2) 巡回調査圃場(7月第1週、親株)では、発病株率 0%(平年 0.1%)と平年並の傾向 (±)</p> <p>3) 一般圃場では、発生量は少～やや少 (概してやや少) (－)</p> <p>考察：現状の発生量はやや少と考えられ、引き続き予想発生量はやや少と考えます。</p>

4. 予察項目の見方

1) 「作物別の状況」の見方

発生時期(平年比)： 平年の発生日日からの差を「早、やや早、平年並、やや遅、遅」の5段階評価で予測します。ただし、発生時期が毎年大きく変化する病害虫では、日数の基準が下記より大きくなります。発生時期を予察する意義の小さい病害虫では予察しません。

日数		-6	-5	-4	-3	-2	-1	平年発生日	1	2	3	4	5	6	
評価		早	やや早		平年並				やや遅			遅			

発生量(平年比)： 発生密度の平年値からの差を「少、やや少、平年並、やや多、多」の5段階評価で予測します。平年値との比較なので、平年値が小さければ、「多」になっても見かけの密度は多くないことがあります。毎年多発生している場合は「平年並」や「やや少」でも見かけ上は多いと感じることがあります。

		平年値 ↓				
度数	10%	20%	20%	20%	20%	10%
評価	少	やや少	平年並		やや多	多

発生量(程度)： 発生程度を「小、中、大、甚」の4段階評価で予測します。評価の基準値は病害虫毎に異なりますが、大雑把には、「見た目の多さ・少なさ」です。甚になるほど見た目は多くなり、小になるほど見た目は少なくなります。「発生量(平年比)」と比

べることによって、「平年並に発生程度が小さい」「発生程度は大きい」「平年並の発生量である」「平年より多いが、発生程度は小さい」「平年よりやや少ないが、依然として発生程度は中くらいである」等のように判断してください。

小	中	大	甚
---	---	---	---

要防除圃場率(平年比)： 防除の必要性の目安を「低、普通、高」の3段階評価で予測します。「普通」であれば、県下の大半の圃場では防除暦に沿った通常の防除が必要と予想されます。「高」であれば、防除時期の見直しや追加防除などが必要になると予想されます。「低」であれば、防除回数を減らせるか、防除しなくても済むと予想されます。

低	普通	高
---	----	---

発生消長の一例： 発生予報は向こう1か月の予報ですが、その前後を合わせて40日ほどの病害虫の発生消長の一例をグラフで示します。大まかな目安として利用してください。

防除の注意事項： 向こう1か月の病害虫の特性と防除に関する説明です。

2) 「発生時期・発生量(平年日)の予察根拠」の見方

(±)：平年並の要因

(+)：発生量増加または発生時期遅延の要因

(-)：発生量減少または発生時期早期化の要因

5. 気象のデータ

東海地方 1 か月予報 (令和元年 7 月 11 日 名古屋地方気象台発表)

期間のはじめを中心に前線や湿った空気の影響を受けやすく、向こう1か月の日照時間は平年並か少ないでしょう。

向こう1か月の気温はほぼ平年並ですが、期間のはじめは冷たい空気に覆われるため、1週目の気温は低い見込みです。

1 週目 7 月 13 日～ 19 日	前線や湿った空気の影響で、雨や曇りとなるでしょう。	津の降水日数・晴れ日数の平年値 2.7 日・3.4 日
2 週目 7 月 20 日～ 26 日	平年と同様に晴れの日が多いでしょう。	同 2.3 日・4.2 日
3～4 週目 7 月 27 日～ 8 月 9 日	平年と同様に晴れの日が多いでしょう。	同 3.9 日・9.4 日

東海地方週間天気予報 (令和元年 7 月 17 日 10 時 33 分 名古屋地方気象台発表)

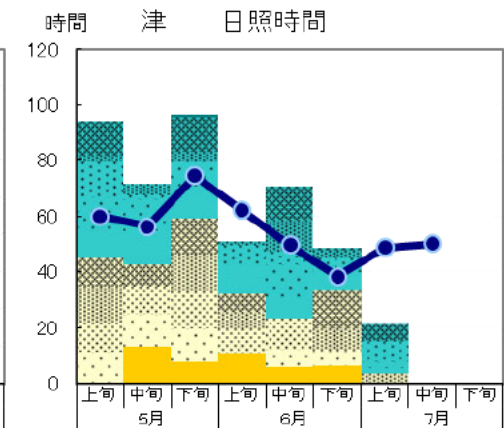
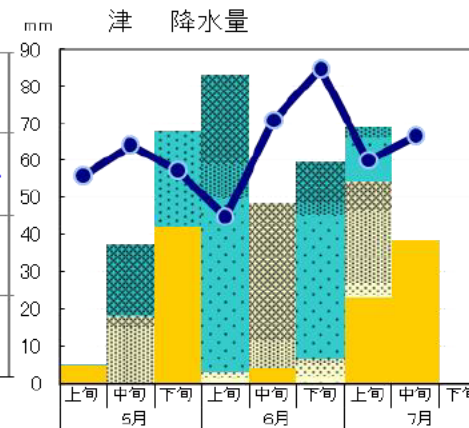
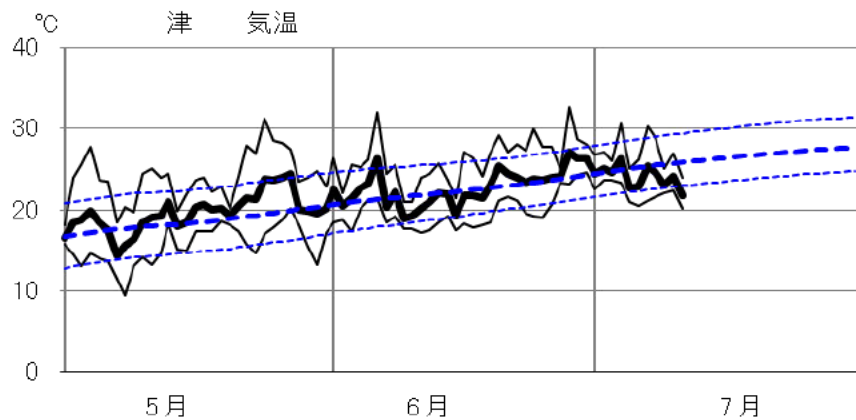
予報期間 7 月 18 日～ 7 月 24 日

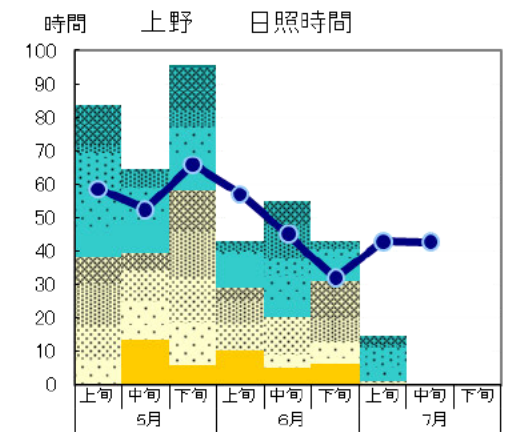
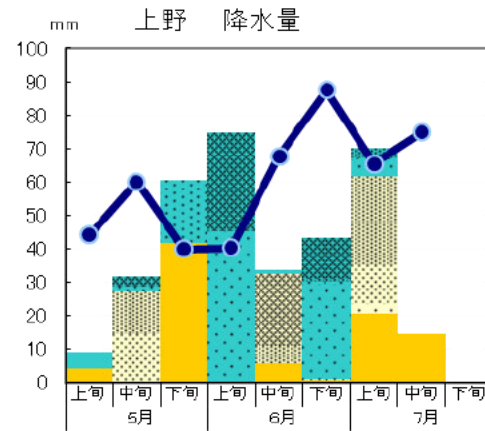
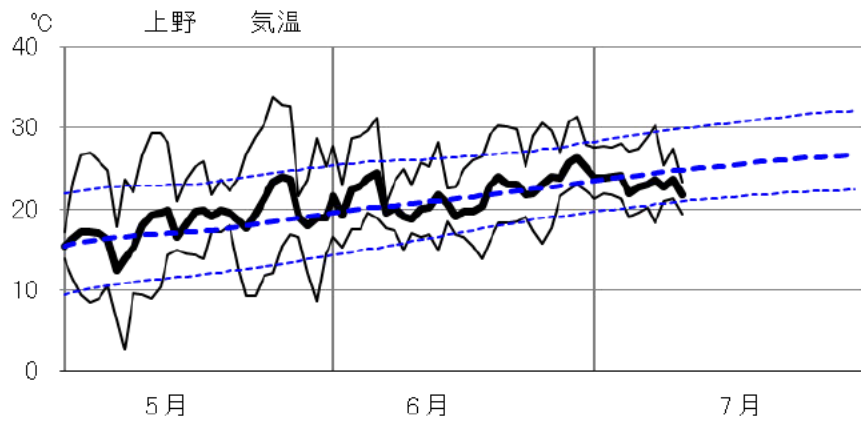
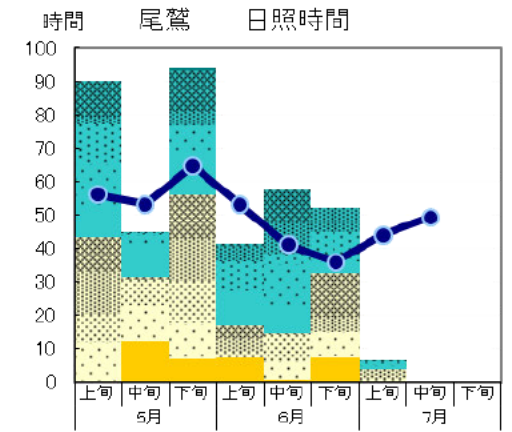
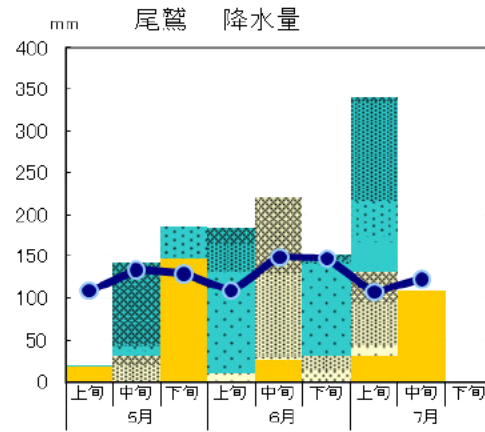
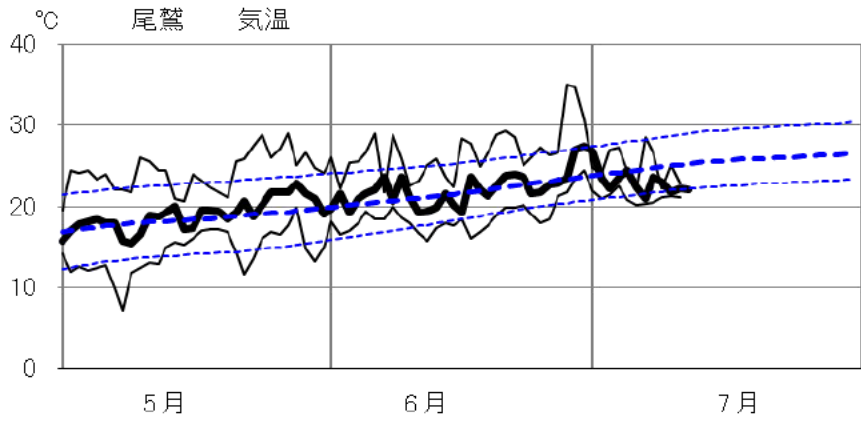
向こう一週間は、前線や湿った空気の影響で曇りや雨となるでしょう。また、19 日から 20 日は、前線の活動の程度によっては大雨となるおそれがあります。

最高気温は、おおむね平年より低く、期間のはじめはかなり低い所がある見込みです。最低気温は、おおむね平年並ですが、期間の前半は平年より低い所があるでしょう。

降水量は、平年より多く、かなり多い所がある見込みです。

気象の日別推移 (気象庁発表データ <http://www.data.jma.go.jp/obd/stats/etrn/index.php> から作成) (7 月 11 日まで)





- 凡例
- 平均
 - 最高
 - 最低
 - 年平均
 - ... 平年最高
 - ... 平年最低

- 凡例
- 31日
 - 旬10日目
 - 旬9日目
 - 旬8日目
 - 旬7日目
 - 旬6日目
 - 旬5日目
 - 旬4日目
 - 旬3日目
 - 旬2日目
 - 旬1日目
 - 旬平年値

- 凡例
- 31日
 - 旬10日目
 - 旬9日目
 - 旬8日目
 - 旬7日目
 - 旬6日目
 - 旬5日目
 - 旬4日目
 - 旬3日目
 - 旬2日目
 - 旬1日目
 - 旬平年値

農病害虫防除所

6. おしらせ (前回と異なる項目には **NEW** の印があります)

1) 記載基準の注意点

平年ほとんど発生のないか非常に少ない病害虫については、平年並に少ない発生状態の「発生量平年比」を「平年並」、「発生量程度」を「小」と記述しています。

2) 発表日 **NEW**

本年度の病害虫発生予報は次の予定で発表します。

第1回 4月25日(木)(済み)	第2回 5月23日(木)(済み)
第3回 6月20日(木)(済み)	第4回 7月19日(金)(今回)
第5回 8月22日(木)	第6回 10月24日(木)
第7回 3月19日(木)	

3) 利用方法

全部または一部をコピーして回覧・配布にご利用ください。ただし必ずページの右下にある「三重県病害虫防除所」の文字が入るようにしてください。

病害虫防除所ホームページには、この予報をはじめとして、不定期に発表される警報、注意報、特殊報、技術情報や、各種のグラフ、写真も載っています。下記のアドレスからお入りください。

<http://www.pref.mie.lg.jp/byogai/hp/index.htm>

このホームページはフリーリンクです。リンクする場合、事前の承諾申請等は不要ですが、事後で結構ですのでメールにてご一報いただくと幸いです。

4) 本冊子の利用の手引き書

本冊子の見方を説明した「病害虫発生予報利用の手引き」があります。下記のアド

レスからお入りください。

<http://www.pref.mie.lg.jp/common/content/000835764.pdf>

5) メール配信サービス

予報、警報、注意報、特殊報、技術情報が発表されたときに、ホームページに掲載されたという「掲載通知」を電子メールでお知らせしています。このメールの配信を希望される方は、下記のアドレスからお申し込みください。

<http://www.pref.mie.lg.jp/byogai/hp/39475007379.htm>

6) 農薬登録状況の最新情報

農薬の販売や使用に当たっては、農薬登録上の制限があります。農薬の使用時はラベルをよく読んでください。次のインターネットサイトでは、最新の農薬登録状況が確認できます。

独立行政法人農林水産消費安全技術センターの「農薬登録情報提供システム」

http://www.acis.famic.go.jp/index_kensaku.htm

7) IPM(総合的病害虫・雑草管理)実践指標について

三重県では IPM を実践する上で必要な農作業の具体的な取組内容を示した作物別の指標を公表しています。農業者の皆さんの取組について、現状把握と今後の気づきにご活用ください。病害虫防除所ホームページにリンクを設定しています。

三重県農林水産部農産園芸課ホームページ内

<http://www.pref.mie.lg.jp/NOAN/HP/80301022763.htm>